

# 建築を通してこれからの仙台を考える

## 1. 設計理念と考え

### 共に存在しているということ

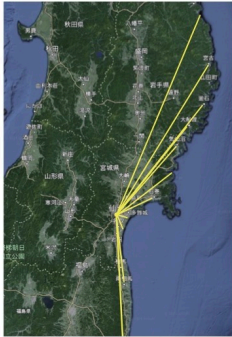
「中心部震災メモリアル拠点」と「音楽ホール」の二つを、工夫を凝らしながら頑張って融合するというよりもむしろ、お互いがお互いを尊重し合いながら、「それぞれがそれぞれのままにある」という状態をつくり出すの方が自然であり、豊かであると感じます。そこでこの土地の環境特性を読み込み、それに呼応するように各々を計画していきます。広瀬川とケヤキ並木に挟まれた土地の状況を活かし、それに沿うように奥へのびやかに空間を展開していきます。そうすることで活動的な賑わいの場と静かで落ち着いた場が自然と生まれ、各々の機能の中で自然と棲み分けが起こります。明るいと、静かなところ、外と繋がる場所など、機能の接続による融合だけでなく場所の特性から近い感覚の人たちが集い、自然な形で繋がりが生まれることを期待します。

### おおきいということ

敷地面積に対して建物ボリュームが大きくなってしまおうところを、敢えてより高く引き上げることで、その大きな気積の中に吹抜けや半屋外空間をたっぷりと内包した状態をめざします。隣接して並んでいた部屋と部屋のあいだに空隙が生まれ、そこへ光と風が流れ込み、建物の先に山の緑や空の青さが透けて見え始めます。大きいということが、構成に明るさをつくり出し、建築と周囲の自然との調和が図られていきます。

### 遠くまでつながるということ

かつての青葉城がそうであったように、この土地から遠景を望み、遠くと繋がるということは特別な感覚になるものです。上へ上り、東へ視界が大きく開けたこの建物から、川辺の高い木々の頭を超えて遠くを眺めると、そこには東日本大震災で被災した地域を感じ、想いを馳せることができます。ここを訪れる日常の中に、「遠くまでつながる」という経験が織り込まれることもこの建物の大切な一つの側面となります。



### 奥行きがあるということ

明るく彫りの深いこの建築は、半屋外空間を沢山纏っています。内外の境界に奥行きがあることで閉じられがちなハコとしてのホール建築が周囲と馴染み、開かれていきます。また駅から敷地の奥までの長さを活かすように建築を南北に長く延ばしていきます。場所ごとの環境の差とその物理的な距離によって、動と静の場の濃淡が生まれ、それを活かすようにホールのホワイエを奥に配します。そのアプローチの長さや変化が、音楽鑑賞へ向かう高揚感と、鑑賞後余韻に浸り続けるためのゆったりとした時の流れをつくり出します。

### 川の瀬と淵から地続きであるということ

敷地は大きく蛇行する広瀬川に面し、川の瀬と淵が近接する多様性に満ちた生態系が形成された場所となっています。土地の地形も急斜面と平場と蛇行形態が有機的に交じり合い、流れと滞留空間が自然の中に織り込まれています。これらと地続きのランドスケープを描き、そこに建築を重ねながら立体的に引き上げていくことで、この土地固有の豊かな地形を新たにつくり出していきます。

### 音楽は身体的であるということ

リズムから始まる「音楽」は、喜びや悲しみなど、人間にとって根源的な感情と繋がる瞬間に心と身体が震え、迫力を感じます。殊、楽都仙台においては、それが被災した人々に絆を感じさせ、未来へと引っ張って行く力があつたのだと思います。音楽というものが非常に身体的であるからこそ、身体感覚を刺激する建築空間から音楽が始まることもあるかもしれません。明るさや静けさ、暖かさなど、建築がつくり出す環境そのものが、新たな音を紡ぎ出し始めます。

### 動き続けているということ

散策を促す裏の無い空間の中で、創作、表現、発見、発信、鑑賞が絶えず行われ、動き続ける建築をめざします。「あそこに行くとかかやっている」という状態の継続が文化創造へと繋がり、仙台らしい新たな未来が描かれていきます。

### 反転し続けるということ

プロとアマ、観る、観られる、内と外といった、相対する二項が同居し、その関係が絶えず反転し続ける状態をめざします。地下は創作活動を支える裏舞台です。そのプロフェッショナルな空気が漂う場に隣接して誰もがふらっと立ち寄れるアトリエやワークショップスタジオがあり、そこにあるからこそ考えも及ばなかったやわらかな発想が絶えず生まれていたりします。また発見的な場からあらゆる場所で見立てが起こることで、日常の風景が急に演劇空間となったりと、音楽ホールとなったりします。そのダイナミックな関係の反転が、仙台を動かす町のエンジンとなっていきます。

### 能動性を喚起するという

「使いやすい」を超えて「使い倒したくなる」場をめざします。それは構成や設えがオープンな建築であり、素の構造が見える建築でもあります。柱や壁、床、梁、階段といった強度のあるエレメントが身体感覚を刺激しながら創造的な活動を引き起こすトリガーとなり、実験的且つ発見的な使われ方が為されていきます。

### アドホックであるということ

ホールやリハーサル室、オフィスなどの閉じたボリュームは各々距離を取りながら敷地の上に浮かんでいます。陽の光やアプローチの距離、視線、動線、音環境など各々の理由と関係で位置が決まり、構造をきっかけにしながらアドホックにその形が紡ぎ出されていきます。こうした作り方が建築に密度と強度を与え、使い倒される自由さとダイナミズムが生まれていきます。

### 自由であるということ

このように内外一体となって立ち上がる建築は、出会いときっかけに満ち、あらゆる空間から音楽が生まれ、楽しむ場へと育っていきます。あらゆる場がステージとなり、客席となります。川の音から音楽が始まり、階段の踊り場が舞台になります。その地続きで自由な関係が建物自体を本質的に開いていきます。

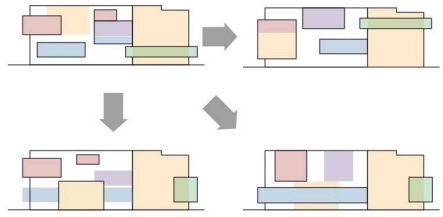
### 都市的であるということ

かつての青葉城がそうであったように、自然に溶け、美しく馴染むだけでなく、人間の活動を纏いながら建築がいかに力強く立ち上がっていくかも、文化を創出し、仙台という町を動かしていく上で大切なことと考えています。立体化することで人間の活動エネルギーが満ちる都市的な建築に魅力を感じています。

## 2. 設計を進める上で特に留意すること

### 余白の多いボリューム構成で変更に対応

あえて建物を高く引き上げて空隙の多いボリューム構成としていきます。これにより、設計段階で関係各者のお話を伺って、一緒に全体フレームの中でのボリューム配置の在り方を再検討し、柔軟に変更に対応していくことが可能です。

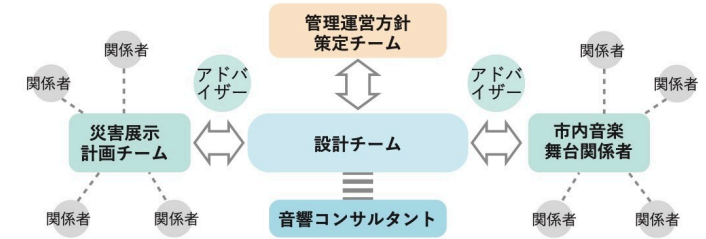


### 広場エリアの音環境をデザインします

ホールと同様、各ロビー空間で行われるパフォーマンスの音環境も重要です。ボリュームが立体的に交錯・積層している交流イベントロビーでは、音が複雑な反射経路を辿り個性ある豊かな音環境が生まれることを期待しています。また、どこからともなく聴こえきく半屋外空間でのストリートライブや練習の音に誘われて歩を進めると思わぬ出会いがあったり、楽器の音色に限らず、人のざわめきや靴音、川のせせらぎや雨音なども日常を彩る音楽に聴こえる。そんな、いつも敷地全体が音に溢れている施設づくりを目指したいと考えています。各所にふさわしい音環境はどのようなものかを検討し、広場エリアについても音響シミュレーションを行い、適切に床壁天井の仕上げ材を選定します。また可変可能な天井音響板や可動のパーテーションを設置し、状況に応じた音環境のコントロールを検討します。

### 多くの専門家の知見・知恵を結集し、ソフトとハードの歩調を合わせ目指す施設像を纏め上げます

音響コンサルタント、劇場やメモリアル拠点の整備に関する専門アドバイザーと密な対話を行い設計を進め、また並行して行う管理運営方針の策定チーム、展示設チームの検討状況を細かく共有します。市内の舞台・音楽関係者やメモリアル事業の関係者の意見も吸上げ、目指すべき施設像をトータルにデザインします。



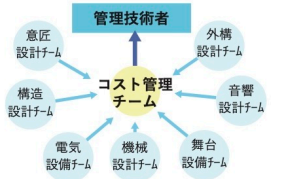
	室内							半屋外・駐車場			合計 (容積対象床面積)
	ホール エリア	文化芸術創 造支援・活 用エリア	災害文化創 造支援・発 信エリア	広場 エリア	運営 エリア	共用部	小計	半屋外 (屋根下)	駐車場 (車庫以外)	小計	
6F	155						388			0	543
5F	1,222	488		192			611	71		71	2,584
4F	190	289			1,459		913	1,033		1,033	3,884
3F	735	876	587		1,147		974			0	4,319
2F	735		1,636	45			920	912		912	4,248
M2F	630						199			0	829
1F	1,254			2,518			512	2,033		2,033	6,317
B1F	4,209	1,502					3,163		1,080	1,080	9,954
B2F							600			0	600
計	9,130	3,155	2,223	2,755	2,606		8,280	4,049	1,080	5,129	<b>33,278</b>

< 32,000㎡

※その他B1Fに車庫4700㎡ (容積対象外)

### コスト情報を一元管理

コスト管理チームより管理技術者へコスト情報を集約し、一元管理することで各設計者への調整等の指示連絡を速やかに行います。



## 3. コスト縮減に関する提案

### 半屋外化と動線空間の活用で面積規模を縮減

クワイエットスペースや通路空間などの広場・共用空間をできるだけ屋根のある外部空間とすることで室内面積を低減しコストを縮減します。また動線空間を展示スペースやラウンジとして重複して使用することでさらに床面積をコンパクトにしています。

### シンプルな空調でスペース・機器費用を縮減

熱源は、ヒートポンプ機器の能力向上に合わせ、モジュール型ヒートポンプチラーと空気熱源ヒートポンプパッケージエアコンとします。これにより、装置用スペースや機器費用などのイニシャルコストを大幅に軽減するとともに、ランニングコストや将来の大規模改修の費用も縮減します。

### 省エネ配慮した空調方式でランニングコストを低減

ホールは床面からの置換空調換気方式とし、居住域を効率的に空調・換気します。空調機系統は舞台と客席とで分け2台をインバータ運転させることで、使用人数・負荷に応じて運転を行い省エネをはかります。また、客席床下のピットを空調チャンバーとして活用しダクトレスとしてイニシャルコストも低減します。

### 使用水の大半を雨水でまかなう

地域の雨水は年間1200mmであり、このうち約60%を集水利用し浄水・植栽灌水として利用し、上水使用量の70%を雨水で賄います。

## 4. 将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

### フラットスラブ構造によるフレキシビリティ

梁のないフラットスラブ構造からなるフリースペースにより、諸室のレイアウトの変更や配管設備の更新にフレキシブルに対応します。

### 高強度コンクリートにより耐用年数向上

広く開放感のある空間とするため高強度コンクリートを採用します。これにより耐用年数が向上し、長期に渡ってスケルトン・インフィル構造を実現します。